令和４年度　第２回総合教育会議

日時　令和５年２月 20 日
午前９時 00 分　開会
場所　丘の上結いスクエア「ムトスぷらざ」
大会議室Ａ・Ｂ会議室

１　開　会

〇塚平部長

おはようございます。飯田市企画部の塚平と申します。

ただいまから令和４年度第２回総合教育会議を開催させていただきます。

前回の第１回会議は、８月５日に本庁で開催させていただきました。「読書の推進と読解力について」というテーマと「飯田型キャリア教育」という大きなテーマは本日も同様でございます。８月の第１回を受けて、さらにその後の新井紀子先生の講演会を踏まえて、第２回の会議をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

２　あいさつ

〇塚平部長

それでは、最初に市長からごあいさつをお願いしたいと思います。

〇佐藤市長

おはようございます。今年度、第２回目の総合教育会議ということで、教育委員の皆さんにお時間を頂戴して意見を交わさせていただきます。よろしくお願いいたします。

我々の今日のテーマの読解力の話は、読書量が増えれば読解力が上がると私も思い込んでいましたけれど、必ずしもそうではないという話を新井紀子さんが書籍の中で書いておられて、じゃあどういうアプローチをすればいいのかとか、どういうところが本質的なことなのかという議論をしていければと思います。

私も月１回、広報いいだの中でコラムを書いているのですが、その中で新井紀子先生とお会いした講演の話も取り上げたのですけれど、その記事を読んだ友人から「こういう本もあるぞ」ということで紹介をされました。「誰が国語力を殺すのか」という、衝撃的なタイトルの本なのですが、これは読んでみますと、今の日本の教育現場、子どもたちの置かれた環境がどれだけ大変なことになっているか。読解力のもうちょっと手前のところで大変なことが起こっているという話です。

冒頭の書き出しが、「『ごんぎつね』が読めない子どもたち」っていうところから始まるのですけれど、「ごんぎつね」を読み解くのに社会的な常識とか背景がうまく身についていないものだから、書いてあることが日本語としては分かるのかもしれませんけれど、そこから何が起こっているのかを想像することがうまくできないっていう、子どもたちの今の様子が書かれていて、小学校・中学校・高校で今、どんなことになっているのかということが書かれています。

これを読むにつけ、飯田市の置かれた教育環境はここまではひどくはないなと私は思いますし、教育委員の皆さんが取り組んでいただいている「飯田型キャリア教育」は、これからの時代により求められている方向で間違っていないと、この本を読んで改めて確信したところであります。

今日は新井紀子先生の講演会を振り返りながらの議論と「飯田型キャリア教育」の状況やこれからどうしていくか意見交換ができればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

〇塚平部長

続きまして、教育長ごあいさつをよろしくお願いいたします。

〇熊谷教育長

改めまして皆さんおはようございます。今日はよろしくお願いいたします。

今、市長のお話、大変興味深く伺いました。私も前回、新井紀子先生とお話をさせていただいて、改めて読解力ということは、読解力リテラシーとか、ＰＩＳＡの調査等で話題になったときがあって、それが低いというときがあったので、そう思っていたんですが、では、どうやってっていうことを考えたときに、なかなかパッと浮かんでこなかった。お話をお聞きすると、自分で今まで経験してきたことの中で、これはちゃんとやらなきゃいけないなあと思っていたことがやっぱり大事だということを、改めて再確認させていただいたような気がします。

しかし、教員からすると、その確固たる科学的根拠が、経験値でしかないというところがありまして、そういう意味では、その経験値と子どもたちの実態をしっかりと合わせていきながら、しかし、先生方の中には忙しくて抜け落ちてきてしまわないかなと思うような部分があるかなと思っていますので、改めて考えていきたいなと思っているところです。

またもう１つのキャリア教育については、学習指導要領の中にキャリア教育の推進、いろいろ書いてあるのですけれども、その最終的に教育活動全体の中でキャリア教育は基礎的・汎用的な能力を育むという見方をしていて、簡単に言えば子どもたちが将来、社会の中で幸

福かつ豊かに生きていくための必要な力というような言い方をしていますので、単なる職業調べや職業体験すればいいということではないということを改めてそこにも記されているわけであります。そう考えたときに、前回、ネーミングについては、市長から宿題いただいたままで解決していないですが、中身についてはいろいろと今年も実践をしてきて、先日のキャリア推進フォーラムもありましたので、そんなことも踏まえながら、活発なご意見をいただければありがたいと思っております。

今日はよろしくお願いいたします。

○塚平部長

市長、教育長からごあいさつをいただきました。ありがとうございました。

３　テーマ

（１）読書の推進と読解力について

～ 新しい時代を生き抜くための読解力とは ～

○塚平部長

それでは、テーマ１といたしまして、今ごあいさつの中にもありましたが、「読書の推進と読解力について」ということで、意見交換をさせていただきたいと思います。

昨年 10 月 29 日に、飯田文化会館で第 72 回長野県図書館大会が開催されました。新井紀子先生の肉声を聞けるという非常に良い機会で、「ＡＩ時代を生きるための力」というご講演をいただいております。

まずは事務局から、その講演に関する資料説明をさせていただき、その後、教育委員の皆様方からそれぞれご感想やご質問をいただきたいと思います。

まずは事務局から説明いたしますので、よろしくお願いします。

○瀧本図書館長

中央図書館の瀧本と申します。よろしくお願いいたします。

では、長野県図書館大会の基調講演の報告をさせていただきます。

図書館大会の講師を選定する際に、特に学校の先生方から「今、子どもたちは映像を見て理解することやデジタルで疑似体験することはできるのだけれども、文や言葉を読み取ってイメージを膨らませることができなくなっている」といった課題が挙げられました。

そこで、図書館大会では、読むとはどういうことか、読む力が人が生きていく上でのどういう力につながるのかを改めて考えるために、新井紀子先生を講師にお迎えして、「ＡＩ時代を生きるための力～読解力の重要性と読書の意義」をテーマにご講演いただきました。

資料№.１に講演内容をまとめてございます。

講演の主旨は、「これからの時代、ＡＩができる仕事が増えてくる。ＡＩに仕事を奪われないためにも、自分で文を読んで学ぶ力、新しい技術を学んで解決する力をつけることが重要で、そのためにも、教科書が正確に読める子ども、意味が分かって文を読むことができる子どもを、学校・図書館、大人たちが協力して育ててほしい」というものでした。

主な内容といたしましては、「見る」と「読む」とは違うということで、「子どもが文や図を見てはいても実は正確に意味をつかんで読むことができてはいないということが、先生方や周りの大人に理解されていない。そのために、文の読み方を教えることができていない。人は中学校卒業までに自分の読み方を決めてしまうので、高校へ上がる前までに小中学校で文の読み方、構造を教える必要があること。読みやすいものばかり読んでいても読解力がつかないので、訓練して上達させていく必要がある。」ということでした。

リーディングスキルテストは、講演の中でも具体例を挙げられていましたが、短い説明文を読んで正確に読むことができていることを測るもので、「コンピュータ上でその人の読解力に合わせた問題が出されて分析ができる」というご紹介もありました。

また、参加者からの質問に答えて、「読解力をつけるには視写、聴写など、書くことによって文の型や語彙を身につけるなど、小さいことを積み重ねていくことが大事で、書けるようになったということが子どもたちの自信につながっていく」というお話や、「正確に読み取る力は正確に伝える力にもつながるので、読解力は表現力にもつながる」というお話もありました。

参加者の皆さんからのアンケートでは、「たくさん読めば読解力もつくと思っていたが、そうではないということが分かった」というものや「読解力がないから本の内容が分からない。だから本がつまらないということになるのだということがよく分かった」というもの。それから、「どんなサポートができるか考えたい」といった内容の記載が多数寄せられました。

図書館大会の基調講演の報告は以上でございます。

○塚平部長

ありがとうございました。

それでは、ご感想をいただける委員さんがいらっしゃいましたら挙手をお願いしたいと思います。

野澤委員、お願いします。

○野澤委員

おはようございます。

私は、新井先生の話は聞いてないんですけれど、先ほど市長が出してもらった本、私も実は読んだことがあって、冒頭の「ごんぎつね」の話はちょっと衝撃的なのですけれど、お母さんが亡くなった主人公を、キツネのほうから見ていると、村人がお葬式の手伝いをやっているんですね。その様子を読んだ小学校４年生の班での話の中で、これは、「死体を洗っているっていうふうに解釈をする」っていうのが冒頭に書かれているんです。

私が思うのが、社会が変化してきているので、昔みたいにお葬式で村人の皆さんがお手伝いをして、炊き出しをしてっていうような社会では今ないじゃないですか。そうすると、都会にいる人たちはそんなことをまずしないと思うので、全くその経験のないところにその映像が現れてきて、これ何しているのだろうっていったときに、全く想像ができないということが書かれているんですね。結構衝撃的なのですけれど、ここにいらっしゃる方は多分100％そんなことを思わないと思うのですが、全く知らないとそういうふうになってしまうところが、これから先、怖いことなんだなということがあります。要は言葉を失っている子どもたちの状況がすごく書かれているので、すごく読むとそら恐ろしいものになるのですけれど、実際に言葉を取り戻していって、人間性を取り戻すっていうやり取りも後半に入っているので、そういう部分っていうのは非常に大切だと。

ただ、読めば読むほど読解力がつくかというと今の話のとおりで、全くそれは違っている部分かなあと感じているので。

私が思うのは、前もこの会議でお話させてもらったのですけれど、書くことをやっぱりしっかりしないといけないんじゃないかと思います。作文をして、自分の考えとか思いとかを伝える。どうやって伝えるかを、やっぱり頭の中で構想をして、私が伝えたいことは、こういうことなんだということをきちっと文章にすることができれば、読むほうもできるようになってくると思うのですけれど、どうも書くことを今、ほとんどしないような気がしてならないんです。

もっと簡単な日記でもいいので、ちょっとずつ何かを書く。感情をそこに打ち出す。本の中にもありますが、自分の感情を伝えることができない子たちが変なふうになっている。今、自分が苦しいとか、切ないとか、悲しいとか、その表現の仕方をもう言葉を失っている人たちは「やばい」、「死ね」これで終わっちゃうらしいんですね。ですけど、それを今どんな気持ち、胸が締めつけられるとか、心が痛いとかっていう、こういうふうなことを少しずつ教えていくと、それが収まっていくといった内容が書かれています。

だから、やっぱりそういうものが非常に大切なので、やはり何か自分のこと、自分自身を伝えるっていうことをやることがすごく読解力につながると思いますけれども、一方的にただ「読め」、「読め」では今の話のとおりで、全く書いてあることが理解できないのではないかと思います。

あともう一つ、社会的に言えばすごく変化してきているので、我々でも古文だったら読めないじゃないですか。「ありをりはべりいまそかり」じゃないですけど、全く読めないじゃないですか。

だから結局、社会が変わってくると言葉も多分変わってくると思うので、そういう社会の変遷みたいなものも、言葉の中にあるというのはあるかなあと思います。

例えばＬＩＮＥなんかで、今スタンプを押せば外国人にも伝わるわけですよね。他言語を使う方でも、今の気持ちが「ＯＫ」とかって送れば。ですけれど、そういう社会になってきていることも一つの背景として捉えながら、言葉をどうやって扱っていくかが今後の共通の課題であるかなと考えています。

○塚平部長

ありがとうございました。

講演の感想をご発言くださいと申し上げましたが、冒頭の市長の話を踏まえ、より深くなっておりますので、新井紀子先生のお話を聞いた感想でもいいですし、今の話でも結構ですので、ご意見をいただければと思います。

上河内委員、お願いします。

○上河内委員

新井先生の話を聞きまして、そして市長と教育長の話を聞きながら、私も確かになあというふうに納得しているところがあります。

前回、私はこんな話をしました。「自分の娘は、小さい頃から絵本をたくさん読んでいるけれども、高校で読解力があるかというと疑問だ」というふうに言いました。なぜかと言うと現代文の試験で、なかなか読むのが難しいということで、結構平均点以下だったりして、落ち込んでいる姿を見ていたからです。

ただ、それからもう１年経ちまして、どんな変化が娘にあったかといいますと、高校３年生ですので夏休みに猛勉強をして、そのときに先生にいろいろ教えてもらったと。それを本人が一生懸命、何回も反復して練習していたら、その後、ぐんと伸びたんですね。安定して読解できるようになって、得点源といいますか、自信が持てるようになりました。

それはなんだったかなあというふうにちょっと観察したり聞いてみたりすると、その国語

の先生は、とっても尊敬できる先生で、やはり授業もとっても面白いと。ワクワクするような授業をしてくれて、つい引き込まれてしまう。そんな先生に教えていただいた要約の仕方はこうだとか、ここに線を引いてここに引っ張ってというような読み方の型、例えば接続詞「しかし」だったらこういうふうにして、ここから違う話が始まるっていうことを理解するんだというようなそういう細かいことを教えてもらい、それを反復した。型を知ることでものすごい読めるようになった。ということで私も彼女の文字の置き方を分析したら、そこからすごく安定しているということが分かりました。

新井紀子先生が言ったことですね。見ると読むとは違うこと。好きなものを読んでいるからといって読解力はつかないということはすごく納得した。さらに「人は中学卒業までに自分の読み方を決めてしまう」とあるんですが、もちろん小中で国語、基礎をつけていただいていたと思うんですね、娘も。それでいて、さらに高校の国語という難しいところにぶつかったときに、またその高校の先生に教えていただくことで、またそこをクリアしていってるというか。

だから小さい頃はたくさん本読んだりして、小学校・中学校でまたその課題を越えていくことで、どんどん読解力は伸びていくのかなと。中学卒業までになんて決めないで、そこからでも、大人でも、多分全然違うんだろうなというふうに実感した出来事です。

高校生の共通テストのほうも、試験問題の話を前もしたのですけれど、今年がすごく読解力が要求されるような問題だったと。数学の問題でも国語の読解力がないと解けないようなものだったということでした。どんな教科にもつながっていく読解力というのは、やっぱり伸ばしていく必要があるし、それがあればこれからどんな社会になっても生きていく力となるんだろうなあというふうに感じました。

先ほど野澤委員が言ったように、意味が分からないと読めないこともあるので、飯田型のキャリア教育のように体験をしたり、人と触れあったりというような感動の体験したりっていうようなことをしつつ、本当にコツコツといろいろ本を読んだり、先生の勉強を一生懸命やったりっていう、そういう取組が本当に完成した読解力に向かっていくのかなというふうに感じた次第です。

〇塚平部長

ありがとうございました。ご体験からのご意見をお伺いいたしました。三浦委員お願いします。

〇三浦委員

ありがとうございます。

新井紀子先生のご講演をお聞きした感想は、国語というものできちんとイメージができるということが、きっと意味が分かるということにつながっていく。やはりイメージをする力、それが読解力なんだろうなあと感じました。

改めて新井紀子先生の続編の「ＡＩに負けない子どもを育てる」という本をちょっと手に取って読み返してみますと、先生が「観察やヒアリングという主観を交えての見解ですが」と断ったうえで書いていらっしゃいますが、幼児に対する読解力と言いますか、ＡＩに負けない子どもを育てる対応として、一つには飯田市でも行われている絵本の読み聞かせというのはすごく大切だよと言っています。もう一つは「子どもの周りにある小さな自然に接することやじっくり観察して感じる力をつけるといった機会と時間を持ってあげることがとても大切なんだ」っていうことが、その本にも書かれているわけです。

先ほど野澤委員も、市長が紹介してくださった本のことに関して紹介してくださっていましたけれども、子どもが文章を読んだとき、背景がイメージできないというようなことがあるということが、一つ問題なんだろうなあと。幼少期に、きちんとそういったものの考え方がイメージできること、これは教育なんでしょうか。日常生活といったものの中で環境を与えるといったことはとても大切なんだろうなっていうふうに思います。

この前の飯田市のキャリア教育推進フォーラムの冒頭で、殿岡保育園の報告があったかと思うんです。私も知らなかったツマグロヒョウモンという蝶の報告で、幼虫を「これはなあに」っていうところで、子どもが保育園の先生と育てるお話をお聞きしています。幼虫が蝶になる。これが身近にある。本当の自然の姿だと思います。

幼虫が、どんなものを食べるのか、羽化して飛んでいく姿を思い描いたり、これはどんな蝶になるのかネットで調べて実際に絵を描いてみたり、水族館なる虫族館を企画したり、自ら図鑑を広げながら学ぶ子どもの姿があったという発表がありました。そういったこともまた後から話すキャリア教育の話題になるのかもしれませんが、今ここで言う「読解力」といったところとも関係し、読解力と言ってしまうと、本当に難しいようなことに取り組んでいるようですけれども、自然にある日常の取組もこの読解力を深めていく一つの環境につながるのかなと思いました。

前回、野澤委員が「本当に交換日記が一番いいですよ」って言われていて、私も実は確かにと感じていました。人の文章を読んでそれを理解する。そして、またそれを言葉で伝える。交換日記では言葉を選ぶでしょうしイメージも伝えたい。伝えたいから考えるし、自分がいろいろな語彙を使って伝える。また、それを読み取るといったことが本当に大切だろうなと感じます。

○塚平部長

ありがとうございました。北澤委員、お願いします。

○北澤委員

先週、ＮＨＫの番組を観ていたら、ＡＩの対話型の検索機能が今すごく充実してきていて、その番組の中で出ていたのが、ＳＮＳ上にニュースを配信するプロの方が、今まで一番苦労してきたのは、ニュースをいかに視聴者に見てもらえるようにするか、どういうキャッチコピーをつけるか非常に苦労して時間がかかったけれど、対話型の検索機能でＡＩに５例ぐらいを挙げろと指示すると、キャッチコピー案を挙げてくれると。なので、プロとしてはＡＩが答えてくれた５つぐらいの案をちょっとかいつまんでキャッチコピーをつけることで労力が今までの半分以下になったというような話。それからアメリカの大学生が取材に答えていて、大学のレポートをどんなものを書いたらいいか、そのテーマを５つぐらいＡＩに回答させて、それを使ってレポートを書くと非常に便利だというような話をしていました。

土台があっての上で活用するなら、これからの時代を考えるとそれも非常に有効な使い方かなと思うのですけれど、これから育っていく子どもたちが、土台がない状態で例えばそのＡＩが答えたことが、あたかも自分が考えたことだというような感覚になって、そのまま人が育っていったらこれは心配だなと。要するに、人が先なのかＡＩが先なのかという話になってくるので、怖いなと思いながら観ていました。今日のテーマのところにつなげますと、その読解力というようなことが本当に生きる力の根幹なのだということ。すぐに目に見えて身につくものではないのだけれど、だからといって放っておいて自然に身につくものではないということを、新井先生のお話から改めて確認しました。意識して意図的・計画的に育てるところは育てていかないといけないのだと思いました。家庭や保護者の皆さんの努力で、本人の読書をする習慣を身につけるとか、地域の方々が、現在市内のほとんどの小学校の読み聞かせに入ってくださっている。そういうところで読書に親しむ土台はかなりできている。そういう土台に立って学校に寄せると、さっき上河内委員からも高校の先生のご指導で娘さんが目に見えて読めるようになってきたという話があったのですけれど、発達段階に応じた指導が必要だということを改めて痛感しました。キーワードで言うと、「バランスと充実」というようなことになるかと思います。具体的に何がバランスと充実かと言ったら、読書の質、内容と方法、理解と表現の接続。野澤委員さんもおっしゃっていたようなことになると思います。

自分も学校にいて国語科を担当していたので、自分自身のことも振り返りつつ考えると、指導の中身に偏りがあったということを思うのです。

まず、その「質」「内容と方法」という話です。さっきも話題になっていますけれど、興味を持つ時期を経過した後、学年がだんだん進んできたら、好みのものだけをたくさん読んでも読解力にはつながらない。だから、物語だけではなくて、説明文などもきちっと読んでいく。例えば、例や事実と意見を読み分ける力とか、こういう構成になっているから、この文は分かりやすいとか分かりにくいとかというようなところをきちっと読む。文学でも、時間が現在のことを書いているのか、過去のことを書いているのかとか、心情と情景の関係がどうなっているかというようなところを、改めてきちっと読んでいく正確さというのが必要ではないかと思っています。とかく陥りがちなのは、書かれている内容ばかりに注目してしまって、その内容を表わしている表現の方法・工夫にあまり目を向けない。したがって、心情ばかりを読んでいってしまうというのが、日本の国語教室、少なくとも自分が教壇にいたころの国語教室にはそういうこと多かった。そうすると子どもも感動するから、思わずこちらもその感動しているのに感動して、「これはいいんだ」と思ってしまいがちなのですけれど、もうちょっと言葉・表現としてきちっと受け止めるといったところを抑えてやっていかないといけなかったと思います。

もう１つは、「理解と表現の接続」という部分ですけれど、そうやって学んだ表現方法を、今度は実際に自分の言葉として表現のほうに使う。まさに理解と表現をきちっと接続して学んでいくということをやっていかないと、なかなか読解力というのは磨かれていかないのだということを新井先生のお話からも学ばせてもらいました。

改めて学校生活の全てが読む、書く、話す、聞くという４つの言語活動のまとまりを学ぶ場所であるということを思うわけで、子どもたちに接する先生方は、本当に大事な言語環境を担っているという自覚を持ってほしいし、その中でも国語科は、系統的に言葉を学んでいく教科ですから、子どもたちに生きる力の根幹となる読解力も含めた言葉の力を身につけてもらう、そういう使命を任されているのだという自覚を持ってもらいたいと思います。

今年度、このテーマで２回にわたって皆さんのご意見を聞くことができ、新井先生のお話を聞けたことは、自分にとっても有意義だったと思いますし、この後のキャリア教育のところについても、非常につながりのあるテーマで良かったと思っています。

具体的には、市内の図書館と学校図書館が連携して、環境づくりを進めるところに力を入れていただけることとか、それから、来年度は市内の全小中学校に図書館司書が配置される見通しがあるということもお聞きしていて、ありがたいことだと思います。

○塚平部長

ありがとうございました。

前回、相当時間をとってこの話をいたしまして、新井先生のご講演もあったので、今回はかなりまとまるかなとの思いもあったんですが、冒頭の市長のご提案と紹介された本、むしろ親の世代の問題のご指摘もあり、また、キャリア教育の話も出ましたが、この話は今、お伺いしますと、義務教育的な視点とキャリア教育の組み合わせではないかというご意見もありました。

今日は後段のテーマがキャリア教育ということですが、そこでもさらにこの話が複層的に出てくるんじゃないかと思いますので、委員さん方のご発言は、一旦ここで閉じさせていただいて、教育長、市長の順で再度、この議論としてのご感想を発言していただいた上で、次に移りたいと思います。

教育長お願いします。

〇熊谷教育長

ありがとうございました。

私もちょうど先週、外国の方たちの意見発表の審査のお仕事をいただいて、1年目の方から20年日本にいらっしゃる方の意見発表をお聞きしました。

その審査員の中に、元々外国の方なのですけれど、今、中学校の教員をやっていて、その方も何回も採用試験にチャレンジして合格したっていう努力家の方がいまして、その審査委員のその方が、「私はいまだに教科書を大きな声を出して音読すると意味が分からない」っていうふうなことをおっしゃっていました。改めて「ああ、なるほどな」確かに意味を分かりながら、考えながら読むっていうことはむずかしい。大きな声で読むよりは黙読であったりとか、微音読といって小さな声で読むとかしないと、その修飾、被修飾の関係とか主語、述語の関係等を考えながら読むっていうことはなかなかできないなと思いました。例えば教科書を読むっていうこと一つとっても、やっぱりそういうことも考えながらやる必要があるんだなあっていうことを改めて教えていただいた気がします。

かといって、小学生が上手に教科書を読めないっていうことは、それよりもっと前の段階になるのかなと思っています。外国の方たちの意見発表も、少し助詞、助動詞がおかしかったりするのですけれど、でも、思考していることの思いは伝わってくるので、必ずしも文法オンリーではないと思います。しかし、読解力っていうふうに考えたときには、その外国で長年生きて教員採用試験も通った方のお話を聞いても、すごく大事なことを教えてもらいました。ただ、大きな声で読めばいいっていう、それだけでは子どもたちの力、全て読解力を伸ばすことにはならないのかなと改めて感じたところでした。

今、お話をお聞きしても、子どもたちにとって言葉の力は、すごく大事で、野澤委員さん

もおっしゃいましたけれど、例えば発達障害を持ったお子さんが自分の思いを言葉にできなくて、行動で表わしてしまうっていうようなこともよくあることです。そういったときに自分の気持ちを表わす言葉を聞き返したり考えさせたりするっていう自立活動なんかもあるんですが、そういうこともすごくやはり大事で、自分を理解すること、人を理解することにとっても、言葉を介して理解したり伝えたりすることがやっぱり大事かなあと思います。

そういう中で、国語に限らず、先生方もそうだし、保護者の皆さんもそうですけれど、やっぱり言葉に関心をもって、子どもたちと一緒に学んだり生活したりするっていうことがすごく必要なのではないかと、改めて感じたところであります。

もう一方で、その背景となるような豊かな体験がなければ、ただ言葉だけ覚えても意味も使いもしない、そういうことを考えますと、学校教育にとって言葉の力を高めるということは、家庭教育もそうですが、とっても大きな課題となり、ないがしろに絶対できないことではないかなあというふうに思います。

昔、学習指導要領が変わって、小学校の国語の時間が減らされたときに、国語の教員が「どうして反対しないんだ」と言われたことがありまして、「確かにそうだなあ」と。何をおいても言葉の力はすごく大事だなということを改めて感じました。

○塚平部長

市長、お願いします。

○佐藤市長

読解力の話は、今日２つ目の議題としているキャリア教育の話と完全に地続きだと思うので、あんまり過度にまとめたりしないで、次に行ったらいいかなと思っているのですけれど。

お聞きしていての感想をいくつか申し上げると、上河内さんのおっしゃっていた訓練で読解力の上がるということをお聞きして、私、駿台予備校に通っていて有名講師で藤田先生の「現代文記号読解」っていう講座があったんです。記号をつけていくと、大学入試で聞かれているようなことについての文章の構造が簡単に分かって、答えにたどり着けるという授業があったのですが、受けている学生たちは、現代文が記号で読めれば何の苦労もしないという感じで聞いてはいたんです。やはりリーディングスキルテストがそうであるように、北澤先生も「発達段階に応じて」っておっしゃったのですけれども、ちゃんと読めていくには、文章の構造を理解することは必要なので、読書量と比例しないとしても、読み方のコツみたいなものを発達段階に応じて教えていくことはあると思います。

それから、野澤委員が「書くことが大事」とおっしゃった、これ本当そうだなと思いました。ちょうど昨日の夜、小学生六年の息子がもらってきた算数のプリントの文章題が分から

ず、それを高校一年生の息子が教えていました。

高校一年生の息子が「そうやってすぐ数字を使って計算しようとしちゃ駄目。まず、何を聞かれているか、何をこの問いに対して答えようとしているか、数字じゃなくて言葉で書いてみて」って言っていた。それってやっぱり読みこなす力と書く力が連動していくんだと、ニヤニヤしながら聞いていた。今回、文章題そのものを見てないからどういう問題なのか分からないけれど、書くことと読解力の話を聞きながら昨日の様子を思い出していました。

北澤委員から話があったＡＩも、これは要するに曖昧なことを曖昧に答える力をＡＩに覚えさせるとこうなるみたいな、もっともらしい答えをするパターンを教え込ませると本当にもっともらしいことが返ってくる。だから、より事実じゃないことを見抜くのは難しくなるという話がある。それでもやっぱりＡＩ自体は意味が分かっているわけではない。もっともらしい答えをするパターンを教え込ませているっていうことがあると思うので、本当に我々は気をつけないといけないというのを改めて思います。

そういった中で、次の話題にもつながっていくのですけれど、三浦委員がおっしゃったように、子どもの頃から自然に触れさせたりとか、絵本の読み聞かせをしたりっていうことは、遠回りになるかもしれないけれど、必ず効いてくる話だと私は思っていますし、さっきの「ごんぎつね」が読めるか読めないかっていうので、時代が変化しているから、確かに直会を家でやるっていうことはない。我々の子どもの頃だって直会を家でやるっていうことはなかったけれども、だけど読んだときにまさか鍋でお母さんの死体をお湯で煮ているということは思わなかったわけですよね。

だから、いろんな体験を子どもたちがちゃんと持っているっていうことが、イメージ力とか読解力とか、自分の思っていることを言葉にする力とか、それらがつながっている全てのものが一塊かなという感じがするので、「飯田型キャリア教育」っていうのはとても意味のあることだと思っている。その辺りの仕組みについて議論したいなと思います。

〇塚平部長

ありがとうございました。

ここで松下参与から事業のご紹介をしたいとのことです。

〇松下参与

２回にわたっての総合教育会議で読解力の向上が極めて重要という方向付けが共有されましたけれども、次年度から具体的にどう進めていくかということは、教育委員会の中で今検討しています。

関係性とすると、読書を幼少の頃からすることによって、活字に慣れる、言葉に慣れる習

慣をつくり、これが読解力を高める前提になる。読解力を高めることによって書いてあることが分かるようになって、読書の楽しみが膨らむ。その循環が繰り返し繰り返し行われる。基本的な課題とすると、読書の推進と読解力の向上にどう取り組んでいくかということですけれども、これは先ほども出ましたけれども、読書の推進については、まず学校図書館の司書の体制を補強していくということで考えていますし、図書館ネットワークシステムという形で、これは読書推進につながるということが実証的に多くの自治体で検証されていますので、それを導入していきたいということ。

それとあと、具体的な取組については、現在、学校の教員と学校の図書館司書、公共図書館の司書、教育委員会の事務局職員で、これまでずっと会議を重ねて、具体的にどう取り組むかというところの詰めをしています。

日常の学校の教育活動の中で、社会教育の公共図書館が連携しながら進めていくことが必要だということで、これについては年度内には何とか具体的な取組の方向性を定めて、試行錯誤ではありますが、取組の走り出しをしていきたいと思います。

また、リーディングスキルテストについては、来年は小学５年生全員を対象に試験的に行うということで論議しており、その中の結果を見ながらまた取組を考えていきたいと考えております。

○塚平部長

ありがとうございました。市長、お願いいたします。

○佐藤市長

保護者とすると、もう一つ加えてほしいのは、宿題の中に書く場面がもう少しあってもいい。要するに今、宿題がパッドの持ち帰りで、書く機会が減ることへの心配を親として持っている。もちろん漢字の書き取り、あるいは計算ドリルで書くっていうことではなくて、自分の思ったことを日記に書くとか、生活記録を書くとかっていう、そういう書くことを意識的に子どもにやってもらう宿題のあり方っていうのもあるのではないか。

予算の査定の時にも申し上げたけれど、今、ＩＣＴが進んでいるんで、そこで個別の理解段階に応じた宿題のあり方みたいなものも、もちろんあるんでしょうけれど、そのＩＣＴの導入が書く機会の減少につながっていくということについて心配をしているので、そういうところを意識していただけると保護者としてはうれしい。

○塚平部長

保護者の気持ちを込めた市長としてのご発言でした。

（２）多様な経験を重ねる「飯田型キャリア教育」の推進について

○塚平部長

続いて「飯田型キャリア教育」の推進について、議論に入っていきたいと思いますが、こちらも事務局から資料を用意させていただいています。

まずは、伊藤課長から資料のご紹介をいたしますので、お聞きいただきたいと思います。

○伊藤課長

生涯学習・スポーツ課の伊藤です。よろしくお願いします。

飯田型キャリア教育につきましては、教育ビジョンに掲げる「地育力による 未来をひらく こころ豊かな人づくり」を実現していくための中核となる大切な教育活動として位置づけています。

これまで、小中連携したキャリア教育ということで取り組んでまいりましたが、今年度からは、幼児期から高等教育まで、切れ目のない系統的なキャリア教育ということで、体制を整備してスタート１年目という状況でございます。

資料№.２をご覧いただきたいと思いますけれども、今年度の取組の中で、高校生の意識調査を実施しております。高校生の意識調査については、平成 27 年度に実施以降、実施がされておりませんでしたけれども、高校においても学習指導要領に探究的な学びが位置づけられて、地域と関わる探究的な学習やキャリア教育の成果を測る指標として実施をしております。問１につきましては「ふるさと（自分の生活している地域）に対して愛着を感じていますか。」という問いでございます。これについては小中においてもこういった調査がございませんでしたので、小６・中３・高校生全学年に対して実施をしております。

地域への愛着については、「当てはまる」・「どちらかといえば当てはまる」という肯定的な割合は８割という状況でございまして、前回の平成 27 年度の 75%を上回る結果となっております。これらについては、これまでの小中の取組の積み重ね、また、高校においても地域と関わる様々な活動が行われてきている成果ではないかと捉えています。

問２が「地域（社会）をよりよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思いますか。」という問いでございます。これについては、小中では学習状況調査もありましたが、高校については発達段階を踏まえて、どんな問いが良いか、高校の先生と相談する中で設定をしております。地域課題の解決に関わろうと思う割合は８割を超えておりまして、中学生よりも意識は高いという結果となっております。

問３が「地域（社会）と自分のつながりや関係を意識しながら、自分の将来について考えることがありますか。」という問いでございますが、こちらについては約５割が「地域との関

係を意識しながら自分の将来を考える」という結果となっております。これにつきましては、右下の考察をご覧いただきたいと思いますけれども、この調査は、今回初めて実施をしておりますので、国や県と比較できるデータはございませんけれども、キャリア教育では地域としては地域を担ってもらいたい、またこの地域に縛っているわけではありませんけれども、広く外に活躍していても、地域を支える、そんな意識を持ってほしい。それにつながる指標として、さらに高めていきたいということで整理をさせていただいております。

続きまして、資料№３をご覧いただきたいと思います。こちらは、今年度から高校も含めて少し取組を整理させていただいたものでございます。左側の緑色の「㊥」と書いてあるところが、高校のカリキュラムとして行われている取組で、市の各部署が関わりながら支援をしていく取組を整理させていただいております。それぞれ市内の５校の取組を整理してありますので、またご覧いただければと思います。

右側のピンク色の「㊫」と書いてある部分が、社会教育からのアプローチをしている取組でありまして、生徒が主体的に選択しながら参加できる機会として提供している取組でございます。それぞれアンダーラインを引いてある部分については、次の資料№４から具体的な現場の取組の写真等を含めて整理をさせていただいておりますので、ご覧いただきたいと思います。１ページ目は、高校のカリキュラムの支援ということで、左側が飯田ＯＩＤＥ長姫高等学校の商業科が取り組んでいる地域人教育でございます。こちらは、各地区公民館主事もコーディネーターとして関わりながら、それぞれの地区に入り込んでいろんな取組をしているものでございまして、内容はご覧いただければと思います。右側の探究学習「結いプロジェクト」（飯田風越高等学校）につきましては、昨年度２年生が新しくオープンしたこの場所、ムトスぷらざの活用について検討をしてまいりましたけれども、今年度は現在の２年生が引き継ぐ形で、様々なアイデアを出しながら、２月にはその成果発表が５グループで行われ、取組を支援しております。

右下の「社+学　ムトスぷらざにおける取組」のところでございますけれども、今年度５月にこういった創発、いろんな思いを持ったことを実践できる場所としてスタートをしておりますけれども、飯田女子高等学校の探究学習の作品の展示や、創発コーディネートマネージャーや職員が高校生の相談に乗りながら、取り組んでいるというものを整理をしてあります。

２ページをご覧ください。こちらは、社会教育の取組の高校生講座でございます。地域に誇りと愛着を持ちながら、グローバルな視点で飯田を捉え、飯田を自分の言葉で語れる・誇れる人となり、延いては次世代の飯田を担う人材・社会に貢献できる人材の育成を目指すということで、今年度、東北のフィールドスタディという形で実施をした内容をまとめてござ

います。

続きまして、３ページをお願いいたします。こちらが、学輪ＩＩＤＡの関係の取組でございますが、上の部分の「㊥」というところは、地域の資源を活用した体験的な学びを通して、学校教育での得られる知識や技能と結びつけながら探究的な学びにつなげていくということで、今年度は各高校の先生方が参加していただく中で、高校・地域が連携した研究会というものがスタートをしております。実業高校を中心に、こういった地域の活動というのは、これまでもされてきておりますけれども、そういったものも共有しながら、これからの高校での探究的な学びをどう進めていくかという研究がスタートしております。下の「㊫」ところは、学輪ＩＩＤＡの高大連携の取組でございます。大学生が飯田でフィールドスタディを実施をするところに高校生も一緒に参加しながら、取り組んでいるというものでございます。

４ページをお願いいたします。こちらが、進学を希望する学生に向けた地元企業を「知る機会」の提供ということで、産業界からもなかなか地元の企業を知ってもらえないというようなこともありまして、今年度は飯田風越高等学校と話をしながら、来年度に向けた試行ということで実施をしております。この地域は、今７割の子どもが外に出て、最終的に戻る割合が４割というような状況ということで、特に先ほどの問３のところでも、地域と自分のつながりや関係を意識しながら、自分の将来について考えている割合が 50％程度ということでありますので、少なくとも地元にどんな企業があるのか。この地域でも世界に誇る技術のある企業もございますので、高校生のうちに知ってもらおうということで、取組をスタートしております。なお、求人の状況については、人材不足があって、有効求人倍率はずっと高い状況で推移をしています。飯田地域については、製造業が多く、大学を卒業した工学系の技術を学んだ学生を採用しようとしても、なかなか今人材確保が難しいというような状況を産業経済部から聞いております。この部分については、野澤委員さん、産業界でのお立場でご意見いただければと思います。

５ページは、平和祈念館の関係でも「平和・人権・多文化ゼミナール」。それから最後のページは、伊那谷の自然と文化。こういった専門的な研究する人材も減っておりますので、少しそういった分野に興味がある高校生とつながる取組として、今年度スタートしたものとして資料をお示しさせていただいております。説明は以上でございます。

○塚平部長

教育委員会事務局から説明をさせていただきました。資料を事前にもご覧になっていただいていると思いますが、市長、コメントいかがですか。

○佐藤市長

冒頭のあいさつだったり、先ほどの読解力の感想もそうですが、この飯田型キャリア教育っていうのが、子どもたちの育ちに対して、読解力も含めて、とてもいいアプローチになっていると思っています。

自分の高校時代までを振り返ると、高校時代は特に大学入試に向かって一直線という高校時代だった。もっと寄り道をたくさんしておけば良かったなと、今から振り返ると思うところです。今の時代は、昔に比べていい大学にいけばそれで済むということはなく、いろんな経験を積んでおかないと、一本調子で生きていくことは難しい時代になっていくので、余計に、高校卒業するまでの間にいろんな経験を子どもたちにさせてあげたいと思う。小学校に入る前から小学校・中学校と、都会にいたら今でもいわゆる受験戦争というか、良い塾に行って、良い私立学校、できれば小中高一貫みたいな、そういうのが残ってはいますけれど、そうではない生き方をしていかないといけない時代になっていると思う。そう考えたときに、この地域で育つことの豊かさや厚みが改めて評価されていると思いますし、今までのこの取組を自信を持ってもっと厚みを持たせていければいいんじゃないかと思う。教育委員の皆さんのお考えや、今後の方向性など、どう感じられているか話していただきたい。

○塚平部長

資料提供と今の市長コメントを受けて、委員の皆様からご発言をお願いしたいと思います。特にこちらで順番を設けてございませんので、声かけいただければと思います。野澤委員、お願いします。

○野澤委員

いくつかあります。まず、産業界という話を先にさせていただきますと、これはどの産業でも同じなのですけれども、総務省の統計でいくと 2100 年に日本の人口が一番下側に振れると 3,700 万人、上側に振れると 5,200 万人という推計が出ている中で、毎年一番下まで振れて一直線に線を引くと、毎年 89 万人の人口が失われていくという恐ろしい数字がある。これは２年で長野県がなくなるという数字ということで、単純に小さい都道府県であれば１年でなくなるという勢いで人がいなくなっているという中で、どうやって人を確保していくのかというのは、この地域の産業の我々のような小さい中小企業の特に担い手というのはすごく大変な課題かなと思います。これは簡単に解決できる問題ではなく、いろんな社会問題が絡んでくるとは思うのですけれども、そういう中での話として受け取っていただければと思います。一番よく語られるのは、インターンシップという話があるのですけれども、これに関して言うと先生方の負担が大きすぎるんですね。今、飯田ＯＩＤＥ長姫高校は、そうい

う事務方が確か３人いらっしゃるような話だったんです。ですから大規模校なのですけども、例えばインターンシップも企業とのやり取りから始まって、生徒の派遣をして、その後のまとめをしたりすること自体に、全く教科に関係ない事務方の方が３人いらっしゃる。ほかの高校を聞いてみると、とってもそんな時間を取れない。やってもらいたいのは山々なんだけれど、もう先生にそんな負担かけられないっていうのが実態なんです。企業サイドは、いつでもいいよ、協力するよっていう企業はたくさんありますけれど、学校側にそれを負担をさせる、非常に大変というのが今の状況なので、産業センターの中でもどうやって負担軽減できるかということで今詰めてまして、多分来年度の計画で少しずつ負担軽減できるようにもっていこうとしています。そういうところをヒアリングしていますと、いろんな制約が多すぎるんですね。生徒が企業で怪我したら、どっちのどういう責任で、どこの保険でどうするんだみたいな、そんなことから始まって結構あるんで、そういうところも全部ひっくるめて包括的に取り上げていかないと、簡単には事業に際しての同意はできないというのが今、実態なのかなと思っています。そこのところの解決を、どうやってやっていくかっていうのは、縦割り行政の中ではなくて、やっぱり全体で。教育委員会の中でもこれは小中学校ということになっていますけれども、でも高校に対してキャリア教育をやっていきたいという思いであればあるほど、そこの部分に上手に働きかけをしていかないといけないのかなあと思いますので、そんなところにちょっと今後の課題として考えていただきたいなあと思います。

それから、先ほどの話に戻りますけれど、人の社会って結局人間関係じゃないかなあと思うのですけれど、一番の根幹は私はセンス・オブ・ワンダーだと思うんですね。「これ何かな」「不思議だな」「何だろう」というこの好奇心。甥っ子なんかが２歳か３歳ぐらいの子だと思うのですけれども、「おいちゃん、おいちゃん、これ何、これ何」ってうるさいくらい聞いてくるあの世代のあの感覚がそのまんま成長して、少年になっても続いていって、それを上手に周りの大人が引き出してあげるっていうことが、まず一番の取っかかりじゃないかな思うんですね。そこから始まって、いろいろ勉強したりだとか、話を聞いたりだとか、その上に読解力とか理解力とかってあるような気がするので、そこのフィーリングが失われていってしまっているとちょっと怖い。それを酌み取る環境を教育現場っていうのは作っていかなきゃいけないんじゃないかな。それをきっかけとして教科書があり、先生がいてっていうのが、私が思っている教育感なのですけれど、そういうものをもっと大切にしていく部分というのが根深いところにあって、そこがないといくら教えても響かないし、人の心も読めないし、みんな顔色を読むなんてできなくなっていっているので、リモートで会議したって顔色読めませんからね。だからそんなことが、社会がだんだんその部分から切り離されていって、ど

んどん効率化がされていって、お金儲けばっかりにいってしまうような、そんなふうにならないようにベースを作っていかなきゃいけないと思います。それがキャリア教育につながればいいかなと思っています。

○塚平部長

ありがとうございました。産業界の話は承知していなかった話もございましたので、非常に参考になりました。

では、今の話を受けても、キャリア教育でも、ほかの委員さん方のご発言をお願いしたいと思います。

上河内委員、お願いします。

○上河内委員

高校生のキャリア教育の取組の発表がありました。高校生を巡る市の社会教育的なあり方なのですけれども、このところ、本当に変わってきたなあと思います。まず、このムトスぷらざができて、高校生が勉強をする場所ができたっていうのがすごい大きいかなと思います。以前だったら取り合いで、朝早く行っても座れなかったと言って帰ってくることが何度もありましたので、そういう意味でも、こうして高校生の居場所というようなところがきちんとできて、そこでなおかつ高校生が自分たちで何かしたいということを応援してくれる大人がいるという環境が、キャリア教育の中でもすごいありがたい部分として育まれていたというふうに、今すごく感じています。

先日のキャリア教育推進フォーラムでは、幼保小からずっとつながって高校・大学までつながった飯田型のキャリア教育の発表を聞いていて、一番思いましたのは、さっき野澤委員が言ったように、人かなというふうに思いました。高校生・小中学生、「ふるさとに対して愛着を感じていますか。」ということで、市内の小学生が 84.4%、中学生が 76.1%ということですけれども、その中でふるさとへの愛着というのは、具体的に見ていくと人かなと思いました。コロナ禍で、本当にこの何年もそういったのが減ってしまって、本当に悲しいなあっていうふうに思っていたのですけれども、そんな中でも努力をして、人とのつながりを、連携をつなげていこうというふうにした取組が多くあったなと思います。そういった体温の通ったような取組というのが、ふるさとへの愛着につながるし、例えばうちも子どもが外に出てしまって、残念だなあ、このまま外に行っちゃうのかなあと思いきや、もしかしたら帰ってきたいって思ったときに、さあ帰っておいでよ、帰ってきたらこんなにいいところがあるよ、こんなにいろいろ待っている人たちがいるよっていう、その温かさっていうのが、やっぱり帰ってくるための気持ちがプラスのほうに働くと思うので、小中高の間にキャリア教育

を通していろいろな体験を積んで人とのつながり、この地域で頑張っている人たちがいる、そして温かい人たちとつながれたっていう体験をさせてあげることが、外に出てしまった若い人たちも、「じゃあ、田舎に帰ってこようかな」って思えるようになるんじゃないかなあというふうに思いました。

一つエピソードがありまして、２年ぐらいは公民館大会でグループワークできなかったのですけれども、昨日久しぶりに公民館大会でグループワークができました。３、４年前のことですが、グループワークで隣に座った高校生の男の子のことです。彼は「高校ではなかなか自分を出せない」と。「でも、カンボジアツアーに参加することに決めて、それで公民館の主事といろいろ話すようになったら、そのときに自分のことをいろいろ話せるようになった」。初めて「なんか自分って何かできるかも」とすごい希望が湧いてきて、その子は進学校の子だったのですけれども、自分はこれがやりたいということがだんだんその中で分かって、「夢は？」と聞いたら、僕の夢は自分の今いる確か山本とか伊賀良とかそっちのほうだったと思うのですけれども、そちらのほうで介護施設と言ったか、特別養護老人ホームだったか忘れたのですけれど、そういった施設を自分でつくりたいと思っている。そのために大学に進学して、介護・福祉の勉強をしたいと思っている、というふうに語ってくれた高校生がいました。彼は今、大学卒業した頃かもしれませんけれども、それを見ていたときに、キャリア教育、社会教育が高校生に与える影響はすごく大きいなというふうに実感しました。キャリア教育フォーラムで最後に鼎中の先生が「中学生を大人扱いすることで成長する」ということをおっしゃっていたんですが、このキャリア教育の中で子どもを子どもとして扱うというよりは、一人の人間として扱ってくれる大人もいたということで、彼もすごく自分自身を発見したり、成長したりがあったというような感覚がありました。そういう大人も意識をもって接していけるようなキャリア教育が実現されていくと、さらに飯田市の若い人たちというのが、地域に根付きたいというきっかけを持ったりとかするのではないかなあと感じました。

○塚平部長

ありがとうございました。

それでは三浦委員、お願いします。

○三浦委員

先ほど市長のほうから「読解力も含めて、キャリア教育というのはとても良いアプローチではないか」とようなお話があったかと思います。読解力の話をすると、今年度から高校の学習指導要領というものが新しくなったということで、現代の国語の内容が若干そういった

内容変わっているのかなあというふうに思います。現代の国語の内容を見てみると、現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章を学ぶ。現代の社会生活に必要なものを論理的な文章、実用的な文章がどこにあるのかなっていうと、こういった地域社会の中なんだろうなっていうふうに思うわけです。先ほど新井紀子先生の本を読み返したっていう話もしましたけれども、先生のお話の中でも、「高校生に必要なものっていうものが教科書の中にあるというよりは、こういった地域の中にあるんじゃないか」というような言葉もありまして、私もそれを見ながら「なるほど」と思いました。飯田市が行っているキャリア教育という地域の中で、若い人たちがそれぞれの発達段階で気がついた課題に応じて社会の中で学ぶというのは、読解力も含めて、そういった力も含めて、子どもたちにとって愛着以上の学びの場であると感じます。

私も昨日、公民館大会に行かせていただきました。ありがとうございました。基調講演で白戸先生の講演をお聞きしましたが、先生が言われていたのが「地域のことを知らなくて外に出るのではなくて、地域のことを知って、その上で自分の人生を考えたときの選択肢にこの地域が挙がってくるか、またはどこか別の場所で学んだことを生かしながら生きていくか。知らなくて出て行くのではなくて、出て行くとしても、知っているか知らないかといったところは大きなところ。」こういった地域のことを知るといったところが大切かなあというふうに思います。

分散会は「ここで暮らすとは？地域文化から考えよう！」という分散会に出させてもらいました。こちらは「遠山の霜月祭」と「ひさかた和紙」の発表をいただいて、その中でグループとワークをしました。公民館で主体となって活動されてワークに出ている方々の言葉としてとても覚えているのは「活動を楽しい」とおっしゃっていました。「楽しい活動を」、そして「面白く」ということを言われていました。実際は本当大変なんだと思います。地域の中で、例えば「ひさかた和紙」にしても、きちんと場所を整えたり、伝えていく子どもたちといろんなことをやっていく。卒業証書にするまで、紙の植物を育てて、そして自分で漉いて卒業証書の紙を作ってと、そういった活動というものは、これ簡単なことではない。それを楽しいというふうに言える、面白いって言える、そういったふうに思って地域ができる。この地域では、土壌があるんだなというふうに本当に思いました。そういう土壌がしっかりしているこの飯田市で、キャリア教育が展開されるといったことは、本当に意味があることだなっていうふうに思いました。一つ一つの活動で「そうはいったって大変なんだよ、楽しいとばかり言ってられない」と、そんなご意見もありましたけれども、種まきなのかなっていうお話も出ておりまして、種をまく、そういったものを子どもたちがまたどこかで感じ取

ってくれて、どういうふうに花を咲かすのかっていうのは本当に分からないですけれども、そういったものが公民館活動の一つだと感じました。

もうひとつ、霜月祭のほうからお話があったキーワードに「憧れ」というものがありました。面を被ったりとか、そういったものへの憧れ。先輩から褒めてもらうという憧れ。地域の人たちに憧れることができるというのも大切だなと思いました。先ほどの事務局からの説明の資料の最終のところに「トークイベント　オトナよ、自分を語れ。」というものがありますけれども、飯田市の中の自分たちの先輩、それぞれ高齢者の方から若い近い人たちまで先輩たちはたくさんいると思いますけれども、この地域の中にそういった憧れを持つことができるといったところも大切だと思います。

私が勤めている女子短期大学で、実は「ひさかた和紙」とのコラボをさせていただいたという発表も、キャリア教育推進フォーラムで学生が発表させていただきました。「ひさかた和紙」に、デザインを学んでいる学生が刷り込みという方法でデザインをしたランチョンマットを作りました。というような報告だった。ご感想の中に下久堅小学校の校長先生のほうから「子どもたちにランチョンマットを作ってもらえるかな」なんて話が出ましたけれども、もう早速、下久堅小学校のほうに伺って、１つの学年だと思いますけれども、刷り込みの方法を子どもたちに教えて、子どもたちが漉いた和紙にデザインをしてみると。うちの学生が出かけていって、自分が身につけた技術を子どもたちに教える経験をさせていただき、ここ何日かのうちでそんな交流が出てきました。本当に「こういった地域で何かするといったことの種まきや人と人とをつなげるといったことが大事だ」という話がありましたけれども、そういった交流にもつながっていくと。本当に子どもたちが、短大生の先輩として憧れてくれたらうれしいなあと思いますけれども、世代を超えた交流もキャリア教育の中で、学べる一つのものだと感じています。

〇塚平部長

北澤委員、お願いいたします。

〇北澤委員

「人は人の中で育つ」というのは言い古された言葉ですけれども、11 日のフォーラムの発表と今の委員の皆さんのお話もそうですけれど、直接触れているのは昆虫とか、紙とか獅子舞だったのですが、それをスタートにして子どもたちが学んでいくその先のところでは、虫族館をつくって園内全体へ公開したり保護者を招いたり、出来上がった作品を展示販売までもっていった飯田女子短期大学の学生たち。獅子頭を作った小学生は、その後、園児と交流したり外国の方と交流して、さらに外国へ発信したりというようにつながっていて、最後は

人と関わる活動へと発展していました。そうやって人と関わる中から、役立つ自分を感じたり、逆に自分たちにちょっと足りなかったものに気がついたりというような発表がこの間ありました。改めて「未来をひらく こころ豊かな人づくり」に基づく飯田市のこのキャリア教育の体系は、園から大学までつないで始まったのは、ここ最近のところですけれど、これから先を考えると大きな可能性を秘めていると思って見ています。そういう大前提に立って、子どもたちだけが育つのではなくて、私たち大人もそこに関わるときに、一緒に育つという視点から２点申し上げます。

１点目は子どもたちに関わりますけれど、大人が配慮していかなければいけないことも含めて、いかに子どもたちの内面の成長につなげるかというところを落とさないでいきたい。内面の成長には、キーワードとすると「主体性」、「柔軟性」、あと「内面化」といったことが大事になると思います。

まず「主体性」という点で言うと、体験することだけが目的になってはいけない。どうしても、体験のことが前へ前へと出てくるのですが、支援する人も、当事者の子どもたちも、目の前の活動に振り回されて、いろいろやったけれど、そこから何を感じたか、何を学んだかといった本来の目的から外してはいけないというふうに思うのです。時間が足りないとか、子どもたちに成功体験を味あわせたい。「いい活動だったね」という評価を最後にしたいがために、どうしても大人が整えてしまう。結局、全部下準備が済んで整ったところへ子どもを入れて、それで「さあ体験してごらん」と。実際に子どもたちが喜んで、子どもたちはそういうところへ入れば当然賑わいます。賑わって喜びを表わしたりしていると、「いい活動だったね」として終わるというパターンは、今までもかなり見てきているし、自分もそういうことをやってきてしまったなという反省もあります。一番大事なところは「あなたたちは何がしたい」とまずは問う。そのゆとり。やる本人の主体性を引き出して、見守る部分がある支援というのが大事ではないかと思います。

それに続く「柔軟性」ということなのですけれど、本日の資料にも立派なカリキュラムがあります。これを受けて各学校では、全ての中学校区、小中連携９ケ年のキャリア教育のカリキュラムがあります。そこには、何年生では基本的にこういう体験をするというような計画がずっと積み重なってあります。計画があることはいいのですが、職員が入れ替わったりしていくと、よく理解していないままカリキュラムが先にあって、そこへ子どもを入れるというようなことも起こり得る。そうすると、子どもたちの主体性といった面からみると、子どもたちは興味があって、本当はこんな活動がしてみたいと思っていたのだけれど、提示された体験活動は子どもたちの思いとはちょっと離れたものが提示されるというようなこと

は結構あると思うので、まず目の前の子どもたちに問いかけて、子どもたちの希望に沿う活動、そういうもので学べるような柔軟性を持ちたい。計画は計画としてあるけれど、いつも計画どおりでなくても、まずは目の前の子どもたちを大事にすることからスタートする活動を柔軟に入れられるのだという、そこのところは大事にしたいと思います。うまくいくということばかり体験させるのが体験活動ではなくて、むしろうまくいかなかったな、正直言ってちょっと失敗しちゃったなという。そこからどうやって解決していくかっていうことを考えさせて、学ばせていくことが、大事なキャリア教育の学びの材料ではないかと思います。実際に世の中を生きていて、そんなにうまくいくことばかりではない。必ず何割かは失敗していて、でもその失敗の中にちょっとうまくいった、良かったっていうのが味わえるからすごくうれしいので、汗もかかず手も汚さずにいて、おいしいものが目の前にパッと出てきて「おいしかったね」だけで終わってはいけないと思います。

最後に「内面化」と言ったのは、先ほどの読書のことからずっとつながっていることですが、まとめには体験を通して自分は何を学んだのか、どんなことを感じたのかということを言葉で必ず記録する、残す。そうやって、自分の中に内面化させていく。なおかつ自分の記録だけにとどめるのではなくて、それを友達同士でお互いに意見交換したり、発表し合ったりして共有する、そういう学びがどうしても必要だと思います。飯田市では、それをキャリアパスポートという形で行っています。これは高校まで 12 年間を持ち上げるということになっていますが、小耳に挟んでいる話だと、中学校から高校へ持ち上げていくとき、中学校で学んだ分厚いいろんな資料を全部挟んだファイルを高校へ持ち上げていく。しかも学校ごとに状況が違う。受け取った高校でも困ってしまう。したがって、現状では高校での活用のしようがないといったことを聞いています。その状態だと本当にキャリアパスポートと言えるのか。要するに、まだ雑然とした資料段階のままにしてある。それを漉しだめして、本人がその中で何を学んだのか、本当に心に残った言葉や体験を選りすぐって記録に留めた、エキスになった数枚のパスポートを大事に累加していって、高校生になったときに見返して、ああ自分は小学校１年生からこんな学びをしてきて、こんなことをずっと感じて、あんなこともあったな、こんなこともあったなとお思い返しつつ、では、自分はここから先どんな人生を送ろうか、どんな進路を選ぼうかというのに役立てる、そういう内容がどうしても必要ではないかと思います。

それから２点目は、さっきからも出ている話で、大人がもっと語るべきだと思います。今、憧れという話もありましたし、語ろうという話もありましたけれど、これもやっぱり意図的にこのキャリア教育の中のどこかの学年のところに仕組む。私は小学校６年生と中学校３年

生がいいと思っています。自分自身も、中３の生徒にそれを必ずやっていましたけれど、自分の身近にいる親も含めて、じいちゃん、ばあちゃん、身近にいる大人に取材をして、その人がどんな生き方をしてきたのかということを手短に800字ぐらいの文章にまとめて、それを全員がクラスの友達に向けて発表し合う。そういう授業をずっと繰り返してきました。それをやると、語ってくれる大人のほうも、自分の人生を振り返って、聞いてくれてありがとうという言葉が返ってきたこともありました。現にこの飯田市に住んでいる人間が語るわけですから、この地元のことや戦争体験とか、家族のことも全部含めて語ってくれるわけです。

そういう大先輩や身内から、こんな失敗をしたときも、苦しかったこともあったけれど、こんなふうに頑張って乗り越えてきて今があるんだという話を聞くことは、子どもたちにとっては一番身近な生きた教材だというふうに思います。飯田市のキャリア教育の体系を見たときに、ここで出てこないのは何かとなったら、地域の大人はいっぱい出てくるのだけれど、保護者があまり出てこない。一番身近な大人は保護者で、なおかつ保護者が、そのお子さんのキャリア教育に一生付き合うわけです。ですから、保護者に語ってもらう場面をもうちょっと前に出してもいいのではないかと思っています。

○塚平部長

ありがとうございました。

市長、教育長含めてもう一巡お願いできればと思っています。

教育長、お願いします。

○熊谷教育長

今お聞きしてて面白いなあと思ったのは２つあって、野澤委員さんが言った「好奇心が大事だ」っていう一番根っこのところです。すごく私もそこ共感するところで、大人が引き出すことが大事だっていうことで、どうすればいいんだろうってことをずっと課題に思っています。恵まれない国の子どもたちは学ぶことにものすごく目を輝やかせていますけれども、日本の子どもたちにはそこまではまだなかなかいけないなと思っているので、その辺がキャリア教育にとってもすごく大事なところだし、学校の今の学びでも、今までの授業は先生が教える授業が中心だったのですけれども、それはもっと子どもたちが主体的に学ぶような授業にっていう方向で、考えています。飯田市でも、そういう自分たちが主体的に学ぶ学びを飯田市は「ムトス」っていう言葉を使わせてもらって、「ムトスの学び」っていうようにしていますけれども、どうしたらそういうふうな学びができるのかっていうことがすごく大事。今の北澤委員さんから「もっと大人が語るべき」っていったときに、昨日の公民館大会で、ちょうど第６分科会の発表を聞いていたら、旭ヶ丘中学校の中学生が、大人に交じって公民

館の仕事を手伝ったりいろいろしていると。それを公民館長さんがインタビュー形式で聞き出したのですけれど「そもそも何がきっかけだったの」っていうように聞いたら「おじいちゃんが地域でごみ拾いをしているのを見て僕も手伝いたい」と言ったそうなんですね。私がおじいちゃんだったら、よしよし一緒にやろうってなるのですけど、そのおじいちゃんは、「俺の仕事を取るな」って言った。そういう話を聞いて、「お、すごいおじいちゃんだな」と思って。その子はその後、夏休みはゴロゴロしていたら、お母さんが今度は「そんなゴロゴロしているんなら公民館の仕事を手伝いにいっといな」って言って、「そういうこともきっかけになった」というお話を聞きました。これは、大人がどうやって引き出すかっていうことの一つのヒントかなとを思いました。いずれ子どもたちがそういうことに興味をもったり、好奇心をもったり、疑念や問いをもったりするには、大人がどういうふうに引き出していったらいいんだろうっていうことは、またご意見いただければなと思います。

○塚平部長

今、一巡して教育長もお話いただきましたけれども、さらに発言機会を設けたいと思います。

野澤委員、お願いします。

○野澤委員

人って成長するっていうのが、私は思うには、冒頭に市長さんがおっしゃられたステレオタイプのようなものではなくて、非常に複雑になっていくのが人の深みが出てくるっていう感じだと思うんですね。どうしてもそこに必要なのは答えのない問いかけ。例えば高校生くらいになってくると、タブー視されているようなことたくさんあると思うんですよね。でも、そういう答えのない問いかけみたいなものを議論していくっていうのは、多分高校生ぐらいからは必要なのかなって非常に感じています。そういうことが、いろんな物事を考える上ですごく役に立つし、対話をしていく中で、人と人との関係性を保っていく中ではすごく大事なことだと思うんですね。我々立ち合っていると、コミュニケーション能力っていうのは、単に会話をするだけではなくて、要は喧嘩をしている相手をいかに仲間にするかっていうのがコミュニケーション能力なんですね。もうそっぽを向いている、そのお客さんをいかにこっちに向かせて、こっちのファンにするかっていうのがコミュニケーション能力なんです。それをやっぱりやるにはどうするかっていうのを一生懸命頑張って、いろいろ工夫するわけですね。そういうことをしていくっていうことが社会だと思うんです。その部分を、単純にただスマホでピッピッってやるのがコミュニケーションだって言ってるのでは、ちょっと浅はかであって、今の社会全体、世界全体を見ても、どうやってそういう子どもたちを育てて

いくかっていうのはすごく大事なんじゃないかなというふうに思う。非常に複雑な社会をきちんとみんなが同じテーブルで、いろんな形で話をしていくような場面というのをつくっていくっていうのが、これからの社会がすごく複雑化していくはずなので、人間ももっと複雑化していかないと社会に対応できないと思うので、そんなことをキャリア教育っていう体系の中に埋め込んでいったらいいんじゃないかなというふうに思っています。

○塚平部長

ご意見ありがとうございます。

上河内委員、お願いします。

○上河内委員

北澤教育長職務代理が言ったように、失敗から学ぶっていうのも本当に大事なんだなっていうふうに思いました。失敗しないで全部整えて、それでちょっと体験しなさいって言われると、子どもだって子ども扱いされていることがきっと分かっているのかもしれないですし、もし大人がそんなふうにされたら、「いやちょっともう少し何かやるのだけどな」なんて思うことは、たまによく整えられたワークショップに行くとそういうふうに感じるとこもあったりします。失敗をできるような、許されるようなそういった環境というのは、すごく大事だなというふうに感じます。失敗から学べるような子どもを育てることは、今の子どもたち見ていて本当にそれが大事だなあと思うのですが、やっぱりコロナ禍がこの２、３年あったっていうのは本当に大きかったなあというふうに実感しているところで、思いっきり体験させることができなかったっていうことは、本当に教育現場にもあったと思いますし、自分も子どもたちの３年間を見ていても、できないこと多かったなって思うし、だから本当にそれを取り戻せるようになるといいなあって、そういったそれもつらい経験であったわけなのですが、そうしたことも理解ができるように、大人たちが子どもを思いやる、愛情を持って接するっていうようなものから子どもたちが学んでもらえるようになるといいなと今、感じております。

○塚平部長

ありがとうございました。

三浦委員、お願いします。

○三浦委員

子どもたちの好奇心だとか、興味を持ったことであるとか、疑問を抱いたことだとか、そういうところに大人も興味を持って、好奇心を大人が上手に引き出すっていうこともありましたけれども、大人のそういった純粋な姿勢というものも本当、大切なのだろうなっていう

ふうに思ったりします。キャリア教育推進フォーラムで、冒頭に殿岡保育園の幼児と蝶の話を出させていただきましたけれども、あれも幼虫を持ってきた子どもに先生が「これ何？」「幼虫だよ」って言えばもうそこで終わっていたかなと思いますし、「蝶になるんだよ。」「育てたい。」「育ててごらんよ、おうちで」って言ってしまえばもうそれはそういうものであったのかなと思います。それを「じゃあ、みんなで育てよう。」っていうふうになるのは、大人が子どもの発達段階の目線に合わせて、好奇心を上手に引き出すといったところにまずスタートがあったんだろうなと思います。季節外に幼虫をみつけた、そんなお話があったかなと思います。食べるものがないからどうしたらいいんだろうっていったときに、子どもが「いつもいろいろ教えてくれる近所のおじいちゃんに聞けばいいんだよ」と言って、そのおじいさんのところに行って、季節外で食べるものがないけれども、どんなものを食べたらいいか聞いてきて、そして食べさせて羽化させたなんて話もありましたけれども、まさにその辺りは子どもたちに権限・責任という重いものではないですけれども、どんなことをしたらいいか、どんなことを考えてどんなふうに動くのかといったところを子どもと一緒に考える。または、ちょっと子どもに任せるといった大人側に姿勢があったんだろうなというふうに思います。課題が明らかになって、分からないといった部分は分かるといったところに興味や関心を持つことができる、これは大事ですし、子どもの分からないものが分かったという楽しさというものもあると思います。上河内委員が、娘さんの話をしてくださいました。読解ができるようになった。できるようになって面白いという言葉が出てきたかと思います。意味が分かって面白い。こういったものっていうは、その子どもたちが得る学びの本当に大きなもので、今、主体的で対話的な深い学びということが言われますけれども、その根幹というのが、子どもたちがそうやって学んでいくといったところも大切だと思います。今日、いろいろな話を聞いていくと、分からないといった疑問を持てるということ、そして、それが分かるという過程を体験できるということ、そういったところがとても大切だなって思いましたし、それを幅広く見ていくと、キャリア教育といったところの「何かこれってどうなんだろう」って思ったことを、「大人扱い」といった言葉が出てきましたけれども、発達に応じた大人扱いを子どもたちにすることで、権限や責任というものを子どもに持ってもらって、そんな学びの過程に大人たちも一緒に興味を持って取り組むと、そういった姿勢が本当に求められている、また大切なんだなあっていうことを様々な意見を聞いていて感じたところです。

〇塚平部長

ありがとうございました。

それでは北澤委員、お願いします。

○北澤委員

私も今、三浦委員が言われた最後のところですけれど、新たな飯田型のキャリア教育の体系では、主人公である子どもたちとそれを支える大人や地域の両方が育ち合っていくというような目線でいくことが、これからの持続可能なキャリア教育が成立する大事な部分ではないかと思っています。大人が全部お膳立てしてしまうというようなところを自重して進めたいということです。

話が変わりまして、高校生のところに関わりますけれど、キャリア教育の出口として就労が近くなる高等学校との連携がようやくというとちょっと失礼な言い方ですけれど、今年からかなり図られてきているのは、非常に前進だと思っています。特に、高校の校長先生方と関係部局の皆さんとの連絡会が持たれるようになったというのが、具体的に進めていく上で大きな役割を果たすと思います。現に先ほど伊藤課長から説明いただいた資料のところに、高校生の意識調査。今までこういうデータすらなかったというふうにお聞きしています。高校の校長先生方にお話して「今年敢えて取らせていただいた」という話もお聞きしました。それ一つをとっても、とても画期的なことだと思っています。このデータを見ると地域との関係を意識している高校生がこんなにいるというのも本当に驚いたし、大事に受け止めたいと思います。特に今年から、総合的な探究の時間が始まっていますので、これだけ地域に関心を向けている高校生に、何か新たな学びの場を提供するというのは、大人の知恵の絞りどころだと思います。先ほど、１回目のところで申し上げたことが、根っこを育てるという意味で、中長期的な取組だとするなら、具体的な就労につなげていくという短・中期の取組が必要になると思っています。そんな中で、前回、高校生のインターンシップのこと申し上げたのですけれど、今、野澤委員さんから「インターンシップは制約が大きい」というお話があって、例えばインターンシップに行ったときの保険とかという話ですけれど。中学校で盛んに行われている職場体験は、ちゃんと保険をかけて行っている。体験学習用の保険というものもいくつもあります。なので、どの保険を選ぶかというだけの話だと思います。

中学校でやっていた取組でとても苦労したのは、始まった当初には、職場と本人の希望のマッチングにとても苦労しました。各学校で先生方が受け入れ職場の開拓をしていたのですけれど、それを中学校の場合は市の担当部局のほうで担ってくれるようになりましたので、飯田市の中学生の職場体験学習は円滑に行われるようになった。県内でもモデルとして他地域でも取り入れているような取り組みになっている。ですから、高校生のインターンシップをぜひ進めてくださいということではないのですけれど、中学校が今やっていることの延長で、マッチングみたいなところを、高校の先生があまり苦労しなくてもつなげられるような

ことが、もうちょっと工夫するとできるのではないかと思っています。

インターンシップまでいかないにしても今日の資料で、進学を希望する学生に向けた地元企業を知る機会の提供を始めたということですが、これも高校生のここに上げてある声を見ると、「飯田下伊那の会社の量にびっくりした」とか「高校在学中にもっと自分も職業について見識を深めたい」といったような意見がある。今までそういう提供の場がなかった。要するに、高校生に、地元を知らせる機会が義務教育までと比べてかなり学校任せになってしまっていたのではないか、そういう反省も込めて、こうした取り組みを始めたことはとてもいいことだと思います。これで理解したから必ずみんな戻ってきてくれるということではないのですけれど、でも、知らないよりは知っていたほうが、必ず選択肢の一つに加わるというふうに思うので、今しばらく工夫して続けていくことが大切だと思っています。

ここからは全く夢のような、今日の場にそぐわないかもしれない話ですが、今日の話の発展として、今、例えば信州大学の新学部誘致の話が進んでいます。それこそさっき野澤委員さんが「複雑なところを議論して、そういうところを考えていくのが生き抜く力にもなる」というお話を聞いたのともつながるのですけれど、先週の 16 日でしたか、政府が若者の進学を議論する有識者会議で、日本のデジタル人材が圧倒的に不足しているので、デジタル人材を育成するために、東京 23 区内にある大学の学部学科の定員増を認めていく。研修だけは地方の企業へ行ってやってくるという条件で定員増を認める方針だというようなことが報道されていました。そういうのを見ると、デジタル人材の育成が手短に目の前でできればいいという非常に小手先の施策のように思いました。冒頭の市長の言葉につながる部分です。短期的に育成するということで、技術面だけを身につけた人間を育てるというならそれでいいと思うのですが、これから先の日本の未来を考えて、本当に世界に通用するデジタル人材を育てていこうという骨太のことを考えるのであれば、信州大学の学部誘致においても、もし飯田でそれが実現できるという方向になったら、学生さんたちが受ける授業は、リモートを使って、世界中の一流の教授陣の講義を設定し、その一方で根っこを育てるところは、この飯田下伊那の地域の特色に学生たちをどっぷりとはまり込ませて、まさに飯田型のキャリア教育体系のさらに四年制大学版を提供することができるのではないかと思うのです。都市部から離れているが故の強みを生かすことができると思います。

具体的には、「ものづくり」「農業」「伝統芸能」「環境都市」「住民自治活動」など、分野や内容は飯田下伊那の特色が生かせるものであればいかようにも組み込めると思います。それを短期間で体験してというのではなく、四年制ですから、今の例示の中から２分野ぐらいを選び、通年かけてしっかりと体験する。そういうふうにしながら、自分が考えたことを地域

の皆さんに提言するというような、人としての根幹を育てるという部分と、専門性については最先端を学ぶということを融合させたような学部が実現していくと、さらに有為な人材が育つ夢があると思っています。余分なことを言いました。以上です。

○塚平部長

ありがとうございました。

それでは市長お願いします。

○佐藤市長

ありがとうございました。感想というか思いを最後に申し上げたいと思います。

当時の自分を振り返ると、余計なことを考えずにいたい、レールに乗っかって行きたいという思いってすごくあったんですね。だけど、その結果として、すごく薄っぺらい状態で社会に出て行く。少なくとも大学に入ったときに自分のふるさとのことも語れない。そういう自分のことを反省すると、子どもたちにはいろんな寄り道体験をさせてあげたい。そういうことがやっぱり生きていく力につながるものだと私は信じたいと思っているので、飯田型キャリア教育のプログラムは、非常に優れたものだし、これからの時代必要なものだと思っています。その中で北澤委員がおっしゃった、このプログラム自体が型にはまってしまい、それをこなすことが目的化することは、本当に陥ってはいけない落とし穴だなと思います。さっきの考えずにレールに乗っていればいいと話しましたが、このキャリア教育のプログラム自体がそうなってしまうと、好奇心を引き出したり、失敗体験をさせるところまでいかずに、先生方は、言われたとおりのことを毎年毎年やっていくっていうことになりかねない。そういう危険性をはらんでいると思うので、こういうプログラムが常に生きているというか、変化したり失敗も含めて変わっていく経験をプログラム自体がしていく、そんなイメージを持ちながら議論をお聴きしていました。色々なことにチャレンジしては修正することを繰り返しながら、この飯田型キャリア教育は行われていくというのが将来の方向ではないかなと思いました。大人が関わる中で、もっと保護者が関わらなければいけないというのはちょっとドキッとしました。自分の子どもに自分の人生を語る機会はほとんどなく、それはちょっと怖い感じがしますが、確かに直接子どもじゃなくても、例えばおじいちゃんおばあちゃんでもいいとすると、とても貴重なことだと思います。そんなプログラムも確かに良いのではと思いました。

このテーマ自体は、様々なものとつながっていることなので、また次回、今日の議論をベースに置きながら、色々な方向から話ができればと思いますし、そして教育が望ましい方向にいけばいいなと思います。今後ともよろしくお願いします。

今日はどうもありがとうございました。

○塚平部長

ありがとうございました。

会議はこれで終了いたします。

閉　　会　　午前１１時００分